

(別紙2)

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名：小嶋 美由紀

小嶋美由紀氏の博士論文「中国語における人称代名詞の非指示化と非現実ムード—— 授与を表す構文を中心に」の審査結果について報告する。

中国語（共通語及び諸方言を含む）には、指示対象を持たない非指示的な三人称代名詞（例：“他 ta”、“伊 i”など、方言によって語形が異なる）を含む構文が数種類ある。本論文はとりわけ非指示的な三人称代名詞を含む構文のうち、授与と関わる二重目的語構文と授与使役構文に着目し、代名詞の非指示化を伴う構文拡張と非現実ムードの関係を追及する。従来の研究では、非指示的な“他”を含む文は非現実文（命令・意思表示・誘いかけや、条件・仮定、義務、可能性・習慣などを表す文）のみに生起し、現実事態の叙述には使用されないというムード制約は指摘されていたが、複数の構文を対象とする体系的な考察はなく、構文拡張の観点からの説明を試みる研究もなかった。本論文はとりわけ非指示的な三人称代名詞が用いられる動機、考察の対象となる各構文における非指示的な三人称代名詞の意味役割、非現実ムードに制約される要因等について論じている。本論文は構文文法（Construction Grammar）の枠組みを用いて、ソースとなる構文と拡張構文が共有する構文スキーマを提示し、構文の各構成要素が拡張過程において被る変化を分析する。

本論文は6章からなる。序章は主に現実・非現実といった概念と、中国語における現実・非現実の言語化の仕方を紹介している。

第2章、第3章では、中国共通語の二重目的語構文と関わる数種類の拡張構文を考察する。非指示的な三人称代名詞の意味役割は、二重目的語構文におけるモノや行為の受け手である。執筆者は、拡張構文が表す行為遂行に対する動作主の強い意図性は、当該構文に含まれる授与意に起因すると主張している。この章ではまた、この拡張構文の様々なサブタイプの繋がりについても考察する。

第4章では、中国の東南部で話される台湾?南語や同じく台湾の東勢客家語における授与使役構文 [名詞1+動詞1+give+名詞2+動詞句2] の拡張構文 [名詞1+動詞+give (+非指示的な三人称代名詞)+形容詞句] を考察する(例：“我想要好好仔?與伊歡喜”「思い切り楽しく遊んでやる!」)。授与使役構文の典型例と拡張例に共通するスキーマの意味は「名詞1は意図的・直接的に動詞句1を通じて名詞2(つまり三人称代名詞)に動詞句2させようとする」である。執筆者は、この構文が主語「名詞1」から「名詞2」に向けた事物・行為の授与行為が関与している使役構文であることに着目し、共通語の二重目的語構文の拡張同様、拡張構文が持つ主語(動作主)の強い意図性と授与意の関連を分析する。また、非指示的な三人称代名詞は「名詞2」の位置に置かれることから、事物や行為の受け手という意味役割を継承していると指摘している。

第5章では、中国の共通語と西北方言の受益構文〔名詞1+給+名詞2+動詞句〕（名詞1は名詞2のために動詞句の表す行為をする、“給”は「与える」に由来する前置詞）とその拡張を論じている。受益構文の拡張は、第2章から第4章まで考察した二タイプの構文（二重目的語構文、授与使役構文）の拡張とは異なり、受益者が一人称代名詞に限定される（共通語は一人称単数“我”、西北方言は一人称包括形の“?”）。この章では、構文は拡張によって命令や意志表明といった発話内行為効力（illocutionary force）と関わる領域に制約されていく過程を分析し、更に日本語の「～てやる/～てくれ」と対照する。

第6章では、粵語（広東語）、上海語、共通語における三人称再述代名詞（resumptive pronoun）を含む文を考察する。再述代名詞を含む文は非現実文だけに生起し、動作主の行為遂行に対する強い意志を表している点においては二重目的語構文・授与使役構文と類似する。非指示化する再述代名詞は二重目的語構文や授与使役構文における代名詞同様、動作の受け手であるが、意味役割は授与行為における受け手ではなく、動作行為の受動者である点において異なる。

以上の考察を通じて、執筆者は非指示的な三人称代名詞が生起する条件を、共起する動詞や他の要素との関係で捉え、同じ構文スキーマを有する構文群の典型例から拡張例に到る拡張過程を提示し、三人称代名詞の非指示化とムード制約の相関関係を分析する。その結果、ムード制約を有する構文へと拡張していく条件として、①非指示化する三人称代名詞は行為の影響を被る着点（終結点）という意味役割を有する「受け手」に限定される、そして②授与の意味を含む構文である、という2点を挙げている。なお本論文が研究対象とする授与と関わる構文の拡張現象は、中国語に限らず、日本語（例：「絶対金持ちになつてやる」）、英語（例：“I will give it a rest.”）、タイ語などの言語においても類似する現象が見られることに言及している。

以上述べたように、本論文は、非指示的な代名詞を構成要素とする中国語の拡張的二重目的語構文について、その構文的特徴を明らかにし、それらの特徴と、当該構文の意味的な拡張過程の関係を追及する研究である。本論文は先行研究が集中していた共通語のほかに客家語と?（ビン）南語における授与使役構文に考察を広げ、当該構文に関わる意味的現象の一般化を試みた点に独創性があり、中国語の構文研究に優れた貢献を果たしている。

とはいえ、論文に不備や問題がなかったわけではない。審査委員から、対象となっている構文と中国語のほかの非現実ムードをもつ構文との意味上の違いに関する議論が不十分であるという指摘があり、また文章表現や概念規定に関して、学術論文としての厳密さにやや欠ける箇所が少なくないことなど、いくつかの改善すべき点が指摘された。しかし、これらの指摘は本論文の学術的価値を否定するものではない。以上述べ来たように、本論文は指摘されたような不備を残してはいるが、従来この分野の研究に見られない総括的な分析を提示し、また類似した拡張現象は標準語以外の漢語の地域変種にもみられることを示したものとして、学術的価値が極めて高い研究であり、今後この分野の研究においては欠かすことのできない必読文献であり続けるに違いない。

よって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。